

女って大変。 働くことと生きることの ワークライフバランス考

編著 澁谷智子

定価 1890 円 (本体 1800 円 + 税 5%)
医学書院



本書には 10 人の働く女性の生き方が描かれている。そして女性が仕事と家庭を両立させるのはいかに大変かが凝縮されている。女性には、男性から代わってあげようと言われても不可能な仕事が課せられている。妊娠、出産、育児（特に授乳）、嫁や母という役割などは代わってもらえないし、すべての女性がそれを拒否したならば国は滅びてしまうという重大な仕事である。それに加えて看護師はその職業上のイメージからか、親類縁者からも看護や介護、看取りといった役割を期待されることが多い。日本人女性の前には、こうした法や制度では解決しきれない壁が立ち塞がっている。

キャリア初～中期にいる方にとっては、人生の先輩である筆者たちが、いかにその人生を受け入れ、乗り切ってきたのかに勇気づけられるだろう。筆者たちは大変さを嘆くばかりではな

く、楽しく、強かに生き抜いている様が素晴らしい。

人の経験からの学びが 大きい

年末のニュースで、東日本大震災のあとに結婚率が上がっていると聞いた。私自身も結婚などしなくても生きていけるようにと看護師になったのに、4tトラックにぶつかられるという死んでもおかしくない経験をした年に結婚を決め、翌年に子どもを授かった。これは生物の本能なのかかもしれない。そのあと「どうやって働きながら子育てをすればいいのか？」とわれに返り、子育てをしながら仕事を続けている先輩方に会っては情報収集をし続けた時期があった。私には「働き続ける」という前提があった。そして多くの方から知恵や手助けをいただき、現在がある。

欧米や東南アジア諸国では、働く女性はシッターや家事代行サービスを利用するのだが、日本では働く女性が家に帰っても家事育児をする「セカンド・シフト（第二の勤務）」が当たり前で、代行サービスを利用することには女性自身が罪悪感すら抱いているというメッセージに共感する。オムツの裏表すらわからない夫とともに姑の介護生活に突入した看護師の物語には、わが身の未来を見る気がする。しかし本書を読み、「こんな経験をした方がいるのだ」と知っていると、先を見通して今から準備を開始できる。筆者からのメッセージは、読者のキャリア・プランニングのうえで十分活かすべきものだと思う。

自分が幸せだと感じられる 人生を歩むべき

女性が「やるべき」と感じていることは、実は「社会が規定しているもの」だということに気づくべきである。社会の価値観と自分の価値観との間で悩みながらも、その呪縛を解いて自分自身が幸せだと感じられる人生を歩むべきなのである。日本の働く女性の約 5.5 % を占める看護師たちの生き方が変われば、女性の生き方が変わるかもしれないと勇気づけられる書である。

どうやって働きながら子育てしましたか？

〔評者〕 ウィリアムソン 彰子 三木市立三木市民病院 看護キャリア開発室 教育専任課長